
You're My Best Friend

正木 慶史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Y o u ' r e M y B e s t F r i e n d

【Nコード】

N 3 5 8 0 Q

【作者名】

正木 慶史

【あらすじ】

突然の雨があつた日、待ちぼうけしている私に声をかけたのは、不思議な言動をする同級生だった。

お天気キャスターのお姉さんは、あの笑顔の裏に腹黒さを持っているのだろう。

本日は、県内全域で一日中快晴が続くでしょう。

まったく、どこをどう見ればそんなすつとんきょうな予報が出来るのだろうか。

昼間くらいから空には雲がたちこみ、放課後となった今ではザーザーと雨が降っている。

傘も無く、その上ついつかり折り畳み傘を家に置いてきてしまった私は、どうする事もなく下駄箱前で立ち往生している。

しかし困った事になった。今日は5時からドラマの再放送が始まるのだ。私の好きなアイドルが主役なのだ。これを見なければファンがすたる。

友達の傘に入れて貰おうとはしたが、各々学校の用事があるので帰りは始めるのが早くても5時30分以降になってしまう。これではエンディングにすら間に合わない。

しかし、こんなところで悩んだところで雨は止まない。しょうがないのでお母さんにドラマの録画予約を頼もうと、私は携帯を取り出した。

「少女よ、なにかお困りかい。そんな沈んだ顔をして」

件名に、お願い！と打ち込んだ時、横から奇妙な話し方で声をかけられた。

横を向くと、私のすぐそばに美形がいた。同じクラスの雨宮君だ。あまみや

雨宮君は現実離れなほどカッコいい人だ。

整った顔立ちに高めの身長。物腰も洗練されてて、なんというか、そう！少女漫画から抜け出てきたような人だ。

そんな彼だから入学してすぐに、彼の周りには人ばかりが出来ていった。

しかし、一週間もたてば人ばかりは消えた。なぜかというと、それは彼の性格に原因があった。

彼は、先の珍妙な台詞に代表されるような変な言動をよくする。

例えば男の子には「少年」。女の子には「少女」。先生には「教諭」と呼び掛けたり、授業中にいきなり立ち上がって、クラスの派手目の女子の手を掴んだと思うと、

「ネイルって物に引っかけたりして面倒なんじゃないか？なんで付けてるんだ？」

と、尋ねたりする。

こんな風に言えば問題児のように思われるかもしれないが、時折起こす奇行以外は至ってまともな生活態度で、成績でもかなりの進学校であるうちで五指に入る程だ。

というわけで女子達からの彼の評価は、「カッコいいし優良物件だけど付き合うのはムリ」というものである。

「少女よ、どうした？いきなり呆けて」

……はっ！あまりの出来事に頭がパンクしてしまった。

まったく、恋愛経験値が0の私に、そんな顔を近づけないで欲しい。

「い、いや。なんでもないよ、雨宮君」

「なんで俺の名前を知ってるんだ？」

驚いた様子で私に尋ねる雨宮君。

「あの、私いちおう同級生なんだけど……」

半年間一緒のクラスにいたというのに、まったく認識されてないのか、私。いや、そりゃあ平凡人間だが。

「おお、そうか。すまないな、人の名前を覚えるのは苦手なんだ。

悪いが再度自己紹介して貰えるかな？」

かわはらはるか
「河原 遙です」

「河原か。いい名前だ。じゃあ今後ともよろしくな、少女」

せっかく自己紹介したというのに少女で呼ばれた。この人はよくわからない。

「で、少女よ。浮かない顔をしてたのはどうしてだ？」

「うん、ちょっと傘忘れちゃって帰れないんだ。ちょっと用事があるって早く帰りたいんだけどね」

私はあたりさわりのない返答をする。ぶっちゃけこんなイケメンと並んでるといたたまれない気分になる。早く距離をとりたいたい。

「おお、それは大変だな。じゃあ傘を貸すから急いで家に帰りたま

え」

というと、彼は手にしていた傘を私につきだしてきた。

「えっ、良いの？」

「ああ、困った時はお互いさまさ」

ニコリ、と花がさいたように微笑む雨宮君。

…… 本当にやめて欲しい。心臓に悪い。

しかし提案はありがたい。謹んでうける事にしよう。

「ありがとうね、雨宮君」

「いやなに、かまわん。ではな、少女」

そういつて、雨宮君はスタスタと雨の中歩いて行った。傘もささず。

「ってちよつと雨宮君！」

「どうしたんだ、少女よ」

振り替えてうろんな顔で尋ねる雨宮君。髪は雨で濡れている。
わあ水も滴るいい男。って違うわ！

「なんで傘もささずに行ってるのよ！？」

私は彼の腕を掴んで屋内に入れる。

「なぜって帰るためだろうが」

「そうじゃなくて！折り畳み傘とか持っていないの？」

「折り畳み傘は持たない主義なんだ」

雨に濡れた髪をかきあげながら、事も無げに言う雨宮君。

「それだつたら借りないわよ。ほらこれ返すから」

「なぜだ。君が使えば良からう」

「あのねえ、さすがに他の傘も持たない人から借りれないわ」

「良いじゃないか。俺は貸したいと思っっているし、君も借りたいと思っっている。これで商談終了、終わりよければすべてよしだ」

「でもそれじゃあ雨宮君濡れちゃうよ」

「濡れるのは俺であつて君ではない。だから君は気にせず、俺の傘を使いたまえ」

なんというか、ここまで話を通じないとは思わなかった。

この人は自分が決めた事を通さなければ気がすまない人なんだろう
か。

「けどさ、やつぱり使えないよ。自分だけ傘さして雨宮君を濡れさせるのはちよつと……」

「ふむ、そうか」

おつ、何が気に入ったのか知らないけど、考え直してくれるみたいだ。もう一押しだ。

「ね、だからこの傘返すよ。私は友達の傘にいれてもらうから」

「よし、決めた。君、俺の傘に入っていきなさい」

「……へ？」

何がどうしてこうなったのか、私は雨宮君と相合い傘で帰っている。なんとか断ろうとしたのだが、家と同じ方向で、しかも歩いて行ける範囲だったので断りきれなかった。

もうなんというか、非常に居づらい。雨宮君はあまり喋らない人だから二人の間には無言が広がっているし、私はこんなカッコいい人がすぐそばに居ると考えただけで今すぐ逃げ出したい気持ちになる。

気を紛らわせるため、友達にメールで先に帰る旨を伝える。無論、雨宮君の事は省いたが。

「早いものだな。女子はみんなそんなに早くメールをうてるのか？」

突然雨宮君は尋ねてきた。

「いや、私はこれでも遅い方だよ。他の人はもっと早いんじゃないかな」

突然言われてびっくりしたが、なんとか普通に答えた。

雨宮君は私の回答に少し驚いたみたいだ。

「ふむ。凄いな。これ以上なのか」

「そういえば、雨宮君は携帯持ってる？」

これを機に話の糸口を見つけようと私は必死になる。いたたまれないまま一緒に歩くのだけは避けたい。

「うん。持っては居るのだがな」

そう言つて雨宮君は、スラックスのポケットに手を入れる。
すると、取り出したのは、いわゆる“パカパカしないタイプの携帯”
”だった。

「あまりにも古すぎて、メール機能が付いていないのだよ」

「えっ！不便じゃないの？」

「いや、あまり携帯が好きじゃないからな。緊急時にしか使わないから電話だけで事済む」

そういえば雨宮君が携帯をいじっている姿は見たことがない。

「だから俺は、メールをあんなに早く打てるのが不思議だったんだよ」

「へえそうなんだ。でもそれじゃあ比較出来ないんじゃないの？」

「いや、家族がメールしているのを見ているからな。だが家族は少女のように早くは打てない」

「雨宮君は兄弟いるの？」

なんともすつとんきょうな話を聞いてしまったが、疑問に思つてしまった。

だが雨宮君は変に思わず答えてくれた。

「弟が一人いる」

意外だ。こんな不思議な性格しているのに長男なのか。

「へえ。何歳？」

「小学5年生だ。姑みたいにギヤアギヤア喧しい奴だな」

なんとなくその図が頭に浮かぶ。おそらく弟さんは真面目な性格で、

雨宮君が時折起こす奇行に手を焼いているんだろう。
想像すると微笑ましく思う。

「やっと明るい顔をした」

「えっ？」

ぽつりと呟くように雨宮君は言った。

「さっきからよそよそし気な態度だったからな。なにか俺がしでかしたんじゃないかと思って不安だったよ」

「いや、雨宮君が悪いんじゃないよ！ちょっと相合い傘が恥ずかしくて……」

「ふむ。あまり好ましい行いではなかったのか」

「うーん。好ましいとかじゃなく、こういうことは恋人同士がする事じゃない？」

「そうなのか。すまないな。俺はあまり物を知らないのだ」

雨宮君は、どこか苦々しげな顔でそう言った。

「物を知らないって、雨宮君頭良いじゃん。ほら、前のテストでも学年3位だったでしょ？」

「勉強なんか教科書を読めば答えは分かる。だが人間関係はどうもつかめない」

少し悲しげな物言いを雨宮君はする。

そういえば雨宮君は学校でもそこまで大人数で話したりしない。大抵は親友である岡崎くんや榊くんの三人でつるんでいる。

「……じゃあさ、私と友達になろうよ」

気がついたら私はそう言っていた。

「ほら、雨宮君ってあんまり女の子と話さないでしょ。だから私と話してたらちよつとは人づきあいがかどるかなー、っておせっかいかな？」

やってしまった。こんな事を言ってしまったら雨宮君が人と関われないネクラだと言っているような物じゃないか。

「ごめんね、変なこと言っちゃって。忘れちゃって」

「……いや、嬉しいよ。ありがとう」

びつくりして雨宮君の顔を見上げると、にっこりと微笑んでいた。

歩きながら雨宮君と話をしていると、いくつかわかった事がある。

ひとつは、彼の奇行はすべて他人を理解するためにしている事だと言うこと。

二つめは、彼の変な呼び方は他人との距離感がつかめない事から来ている事。岡崎くんや榊くんに対しては普通に名前で読んでいるらしい。

そして最後に、雨宮君は話して見れば凄く面白い人だということだ。

楽しくおしゃべりしていると、もう私の家に着いていた。

「あつ、もう着いちゃった」

「そうか、じゃあもうさよならだな」

「うんそうだね」

最初はあるなにいたたまれなかったのに、今では離れるのがもの悲しい。

私は傘から出て、濡れないように急いで庇ひさしの中に入る。

「じゃあね、雨宮君」

「ああ、また明日。遥」

「あら、お帰り。遥。ってどうしたの？そんなに顔を真っ赤にして」
「いや、何でもないよ。ア、アハハ。ちょっと顔を洗って来るね」

冷水で顔を洗い、鏡で顔を見ると見るからに真っ赤だ。

「あれは別に、友達だから名前で読んだだけで他意はないはず」

何度も心に言い聞かせているのに、いつまでたっても顔の赤みは消えない。

「ああもう！あんな満面の笑みで名前を呼ばれたら誤解するじゃない！」

いくら雨宮君を恨んだ所で意味はない。少なくとも明日には、雨宮君と会っても顔を赤くしないように気を付けなければ。
なぜなら私と彼は、友達、なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3580q/>

You're My Best Friend

2011年1月28日04時42分発行